

大堰での食事

——『源氏物語』薄雲巻における——

はじめに

【源氏物語】薄雲巻において、源氏は明石の君の住む大堰邸を訪れる。前年の十二月、明石の君は苦渋の決断で娘明石姫君を手放した。二条院に引き取られた姫君は紫の上の養女となった。山里の大堰では娘と離れ離れになった明石の君と、その母明石尼君が寂しく暮らしている。源氏は「山里のつれづれ」（薄雲巻②四二五頁・四二八頁）^{〔一〕}を思いやり、年が明けて公私の諸行事が落ち着いたところに、嫉妬する紫の上をなだめてからようやく出かける。年末に「忍びて」（四二七頁）訪れて以来である。

大堰邸で、源氏は明石の君と琴・琵琶を掻き合わせ、姫君のことを細やかに語る。その後食事する様子が次のように描かれている。

ここはかかる所なれど、かやうにたちとまりたまふをりを

荻田 みどり

りあれば、はかなきくだもの、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつゝ、いとまほには乱れたまはねど、またいとけざやかにはしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおほえことには見ゆめれ。女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりの事はし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。おほろけにやむことなき所にてだに、かばかりもうちとけたまふことなく、気高き御もてなしを聞きおきたれば、「近きほどにまじらひては、なかなかいとは目馴れて人侮られなることもぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ」と思ふべし。

（薄雲巻②四三一頁）

ここで源氏が食事をするについて、『日本古典文学全集』の頭注は「源氏が大堰の邸で軽い食事をとるのは、うちとけた態

度を示す。」と注している。確かに、波線部に描かれるように、源氏は「おほろけにやむごとなき所」では「うちとけ」ず「気高き」態度をとり、大堰だからこそ「うちとけ」た態度をとっているといえる。しかし、必ずしも「うちとく」を現在の「うちとける」と同じ意味で捉えることはできない。「うちとく」とは、源氏にとって、また明石の君にとってどういった態度であったのだろうか。また、なぜその「うちとく」態度が「はかなきくだもの、強飯」を食べることにつながったのだろうか。

既に末沢明子氏が当該場面の強飯について考察し、「明石君、乃至は明石一族にとっては残された威信を示し、源氏にとっては『上臈しき』ことを保つこと、その二つが重なったものであった。」と論述している。本稿では「くだもの」についても考察を加え、この場面における食事の意図を検討したい。

第一章 「うちとく」源氏

源氏は、近くの御寺や桂の院などに来ることが主要目的であるかのように装って大堰に来ている。今回大堰に行く前に紫の上をなだめすかして出て来たように、源氏にとって紫の上が第一である。明石の君に対し「いとまほには乱れ」ることはない。しかし、明石姫君と別れ、大堰の山里で寂しく暮らしながら、「見る度ごとに、やむごとなき人々などに劣るけちめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく」（薄雲巻②四三〇頁）明

石の君のことを思うと、「またいとけさやかにはしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬ」とあるように、そつげなく通り一遍の扱いで済ますことはできない。源氏にとってその対応が、他所とは異なった「うちとけ」た態度を示す食事である。では、源氏にとって「うちとけ」た態度とはどういった意味を為すのだろうか。『源氏物語』中の「うちとく」の用例を検討してみよう。

『源氏物語』中に表れる「うちとく」の用例は、名詞化、形容詞化したものも合わせ、計一七〇例である。³そのうち、源氏が「うちとく」主体となる例は一三例ある。どのような時に源氏が「うちとけ」ているのかを表1に示した。

まず、源氏はひと気のあまりない所で「うちとく」ことができる。表1-2夕顔巻では、車をやつし、先払いもつけずに出かけ、自分が光源氏だと知らない者はかりの環境に行くことで、「うちとけ」ている。表1-3夕顔巻もその意味では同様の状況である。源氏は「なほうちとけて見まほしく」（夕顔巻①二三一頁）思い、夕顔を廃院に伴う。そして、夕顔と数人の従者しかおらず、「らうがはしき隣」（二三〇頁）の声も「踏みとどろかす唐白の音」（同）も「白袴の衣うつ砧の音」（同）もしない廃院で、「うちとけたまへるさま」（表1-3）を見せるのである。

次に、身内には親近感を覚え、「うちとけ」ている。表1-13幻巻では、紫の上の死によって御簾の内に籠りきりであった源氏を、蛭宮が訪う。源氏は弟にあたる蛭宮ならばと、「うちとけ」

表1 源氏が「うちとく」場面

※視点については、地の文であっても「うちとけ」た姿を見て主観的な感想が描かれている場合は、見ている人物の視点からの描写であると判断した。

	巻・頁	対象	場所	視点	本文	場面
1	帚木 167	―	左大臣邸	語り手	大臣も渡りたまひて、かくうちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、	暑さでくつろぐ源氏を前に、左大臣は氣を使つて御几帳を置くが源氏は苦く思うやつした車のため誰も自分とわからないだらうと氣を許す源氏
2	夕顔 210	―	五条周辺	語り手	御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむと、うちとけたまひて、	源氏が廢院で夕顔を前にくつろぐ様子
3	夕顔 236	夕顔	廢院	語り手	げに、うちとけたまへるさま、世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ。	源氏は末摘花に対し普通なら失礼にあたるといふ細かなことまで世話話を焼いた
4	末摘花 371	末摘花	―	語り手	さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。	源氏は末摘花に対し普通なら失礼にあたるといふ細かなことまで世話話を焼いた
5	紅葉賀 391	兵部卿宮 紫の上	三条宮	兵部卿宮	宮も、この御さまの常よりもことになつかしううちとけたまへるを、いとめでたし、と見たてまつりて、	藤壺や紫の上の縁からうちとけた様子の源氏に対し、事情を知らぬ兵部卿宮
6	賢木 110	(紫の上)	(雲林院)	語り手	陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。	雲林院に籠る源氏は紫の上宛に文を贈る
7	賢木 116	朱雀帝	内裏	語り手	我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。	朱雀帝が斎宮下向のことを語るので源氏もうちとけて語る
8	松風 401	明石の君	大堰邸	語り手	けのたまへる、いとめでたし。	大堰邸の庭の修繕などについて源氏は指図しながら、明石での思い出話をする
9	松風 401	―	大堰邸	明石尼君	いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたううれしと見たてまつるに、	大堰邸でくつろぐ源氏の姿を明石尼君は見て感激する
10	玉鬘 113	紫の上	六条院	右近	うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。	右近は、源氏と紫の上がくつろいで並ぶ姿を見事と思う
11	行幸 286	(玉鬘)	(六条院)	語り手	白き色紙に、いとうちとけたる文、こまやかに氣色ばみてもあらぬが、をかしきを見たまうて、	源氏から玉鬘宛に入内を勧める文(懸想文ではない)
12	若菜上 19	―	(朱雀院居所)	朱雀院	またうちとけて、戯れ言をも言ひ乱れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬つき、	朱雀院、源氏の並はずれた素晴らしさを称賛
13	幻 507	堂宮	二条院	源氏	兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはんとて、	喪に籠る源氏だが、堂宮に対してはうちとけた部屋で対面

た部屋で対面しようと返事をする。表1-5紅葉賀巻では、源氏は兵部卿宮に「うちとけ」た態度で接している。兵部卿宮自身は、なぜ源氏がそのような態度なのか知る由もない。が、兵部卿宮は源氏が愛した二人の女性の身内である。藤壺の兄であり、紫の上の父である。それゆえ源氏は「睦まじく」（紅葉賀巻①三九〇頁）思い「こまやかに御物語など聞こえたまふ」（同）。兵部卿宮は源氏のその「うちとけ」た姿を「いとめでたし」（三九一頁）と思うのである。

宮武利江氏は、「うちとく」について用例を調査し、表1-12若菜上巻の例を挙げて、「源氏は大勢の前でも『うちとけ』た姿を見せ、またそれが賞賛されるという点で他とは少し異なっている」と述べる。確かに「うちとけ」た姿が賞賛されるのは源氏特有の描写であるといえるが、表1-12は朱雀院の言葉であることに注目したい。直前の「うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを」（若菜上巻④一九頁）と対比的に描写されていることから、表立った場面で「うちとけ」たとは言いい切れない。源氏が朱雀院に対して「うちとけ」ている例は、表1-7賢木巻に見られる（当時は朱雀帝）。伊勢下向の折に朱雀院が会った齋宮の容姿が美しかったことや源氏が野宮へ六条御息所を訪ねていったことなど、通常の帝と臣下の関係では語り合わないような不謹慎なことを語り合っている。朱雀院が想定した源氏の「うちとく」姿は、このように身内に対してうちとける姿ではなかっただろうか。朱雀院も帝とはいえ源

氏の兄であり、身内である。

源氏は紫の上に対しても「うちとけ」ている。表1-10玉鬘巻では、源氏と紫の上が二人で「うちとけ並びおはします御ありさま」が右近により目撃されている。

このように、源氏も他の登場人物と同様に、ひと気のない場所でも身内や信頼のおける心安い間柄の人物に対して「うちとく」のだといえる。

なお、表1-11帚木巻の例は、「あまりうるはしき御ありさまのとけがたく、恥づかしげに思ひしづまりたまへる」（帚木巻①一六七頁）とあるように、あまりにもうちとけにくい正妻葵の上を物足りなく思い、若い女房たちと戯れながら、「暑さに乱れたまへる御ありさま」（同）が「見るかひあり」（同）と思われている。そこへ葵の上の父である左大臣がやってくる。左大臣は、源氏の「うちとけ」た様子をはしたないのではなく、自分に「うちとけ」た姿を見られたら源氏が困るだろうとの配慮から、御几帳で隔てて話をする。源氏の「うちとけ」た姿と、葵の上・左大臣の「うちとけ」ない様子が対照的に描写されており、「暑きに」と、にがみたまへば」（一六八頁）と、「うちとけ」ず、源氏の意図的な「うちとく」姿を隠そうとする左大臣を苦々しく思う。源氏にとって、「うちとけ」た姿は親愛表現なのである。反対に、源氏が「うちとけ」ぬ場面は六例ある。そのうち、六条御息所に対して二例を含んでいることに着目したい。

明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。

(夕顔卷①二三頁)

心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。(若菜下卷④二〇〇頁)

夕顔卷では、六条御息所の女房である中将が、六条御息所のもとに「うちとけ」て訪ねてこない源氏を心もとなく思っている。若菜下卷は、源氏が紫の上に対し、往時の女性関係を語る場面である。源氏は、六条御息所に対して「うちとけ」ては見下されないだろうかと考えていたことを明らかにしている。主観的にも客観的にも、「うちとけ」ていない間柄であつたことがわかる。

また、六条御息所自身の「うちとけたらぬもてなし」(夕顔卷①二三頁)や、「うちとけぬ」(葵卷②二八頁)気持ちも語られている。他の例からも、源氏が上流貴族に対して「うちとけ」ることができない様子が表れている。

表1-9においては、明石尼君は源氏のくつろいだ桂姿を「いとめでたううれし」(松風卷②四〇一頁)と喜ばしく見ているが、桂姿でいる源氏が尼君の存在に気づくと、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でて奉る。」(同)とあるように、明石尼君の前では「うちとけ」た姿を見せるべきではないと思っている。年上の尼君であることは勿論だ

が、明石尼君の祖父が中務宮であつたことも影響しているだろう。

この松風卷で源氏が太堰邸を訪れた翌朝、近くの桂の院に人々が集まっている。源氏の訪問を聞き及んで駆けつけた人々だつた。それについて源氏は「いと軽々しき隠れ処見あらはされぬこそねたう」(松風卷②四〇七頁)と話している。太堰は「軽々しき隠れ処」であり、大勢の人に見つけられることを厭いたくなる場所であつた。「うちとけ」られなくなるからである。つまり、通常の大堰邸は都の喧騒から少し離れ、「やむごとなき」人とははば緑のない場所にある。東の渡殿近くの母屋に住む尼君さえ目の届かない場所であれば、源氏が「うちとく」には最適な場所であつた。それは、表1-8のように、「泣きみ笑ひみうちとけのたまへる」と表情を全面に出しうちとけて話すことも許される。源氏にとって「見あらはされ」ることを気にせずいられる居心地のよい空間であつた。

そこで源氏は明石の君と琴・琵琶を掻き合わす。食事が描かれる直前の記述である。「かの明石にて小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば」(薄雲卷②四三〇頁)と語られるように、明石での別れを明後日に控えた夜、琴を奏で合い形見としたことが思い出されることである。源氏は明石でのこの夜、初めて明石の君の姿を目にする。それにより、源氏は明石の君を捨て去り難く思い、どうにかして京に迎えようと思うようになる。この後、源氏が明石の君のもとに押し入った夜以降初めて、和歌の贈答が

描かれ、箏の琴を弾き交わす。初夜からこれまでの間にも源氏は明石の君のもとに何度となく渡っているが、源氏の心中には、京に戻れば二度と明石には帰れないだろうという、明石の君との仲を半ば諦めている感が漂っていた。和歌の贈答はこの琴を弾き交わした夜から源氏の出立直前の「騒がし」（明石巻②二五八頁）い時まで、三回計六首が堰を切ったように立て続けに交わされる。この夜を契機に、源氏と明石の君との関係は、行きずりの恋ではなく、源氏が帰京しても潰えないものへと変化したといえる。

このような明石での夜を思い出している彈奏も、源氏の「うちとく」態度の一端であろう。明石の君が畏まるべき上流貴族でないことも勿論「うちとく」ことができる一因ではあるが、葵の上の前で「うちとけ」、夕顔に対して「うちとけ」たいと思ひ、紫の上と「うちとけ」並んでいるように、「うちとく」ことは明石の君への格別の親愛表現なのである。

第二章 くだものと強飯

源氏が大堰で食事をする前置きとして「ここはかかる所なれど」と逆接が敷かれている。これについて、『弄花抄』は「大かなる所にては物まいりなとする事聊爾にもなかりしにや」とし、『細流抄』は「源の上臈しきやうなりいつくにてもれうしに物なとまいる事はなけれともと也」と注する。どちらにも見られ

る「聊爾」とは、『日葡辞書』に「無礼、不躋」とある。つまり、源氏のような「上臈しき」人が通常外で食事をすることは不躋であると思われる。にもかかわらず、源氏は敢えて大堰邸で「きこしめす」のである。この語には、勧められて食べる意識ではなく、自ら食べる意識が認められる。では、なぜ源氏は「うちとく」ことを示す態度を「くだもの」と「強飯」を食すことで表したのでろうか。

まず、「強飯」について見てみよう。「強飯」とは、甑で蒸した米のことである。現在のおこわにその名残が見える。伊藤博氏は、『宇津保物語』吹上上巻を引き、「神饌の飯は、強飯を用いるのが普通。」とする。また、『厨事類記』によれば、強飯は正月に献じられており、ハレの場の食であったことがわかる。木谷眞理子氏は、『小右記』の「強飯・粥」の例や『源氏物語』中の用例を挙げ、「起床直後に手水などとともに使われる朝の「粥」は、あまりに日常的な食物、ごく内々で食すべきものであるから、「粥」だけを供するのは憚られ、「強飯」が加えられる、ということであろうか。」と述べる。末沢氏も、「強飯は鄭重であることを示しているのではないか。」と考察している。これに同意したい。次に、「くだもの」について考えてみよう。『倭名類聚抄』は、木の上になるものを「久太毛乃」、地上になるものを「久佐久太毛乃」と称す。ただし、小島幸枝氏が、「古くクダモノは、果実は勿論、酒の肴・副食物・間食をも総称した。」と述べるように、この頃の「くだもの」は果実に限定されることなく、現在の

「くだもの」よりも広義で捉えられていた。

実態の判然としない「くだもの」であるが、物語中に「くだもの」と描かれている以上、「くだもの」という総称として、どのような意図をもって描かれていたのかを考えるべきである。果実も含んでいようし、果実でないものも含んでいるかもしれないが、「くだもの」という総称で書かれたことに意味があると考えられる。

『源氏物語』などの平安期の王朝物語では、食を露骨に表現することをはしらないとして忌避する傾向があった。しかし、描かれた「くだもの」はほとんど悪い印象を与えない。『枕草子』には、「つれづれなくさむもの」の章段に、「くだ物」(二五四頁)が見られ、所在なさを慰める物として、良い印象があったことが窺われる。『和漢朗詠集』巻下 酒の項には大江朝綱の詩句として、

菓則上林苑之所献 含自消

酒是下若村之所伝 傾甚美

(菓は則ち上林苑の献する所 含めば自ら消ゆ
酒は是れ下若村の伝ふる所 傾くれば甚だ美なり)

(二五九頁)

とある。「菓」は、「甘棠」という梨のことであり、酒と対して、くだものの美味を称賛している。『和漢朗詠集永濟注』で

も、「クタモノヲホメタルナリ」と注されている。

また、小林章氏が多肉多汁のくだもの(液果)について、「宮廷や一部の階級官吏にだけ食用が許され、一般人は祭時にだけ解禁された。」と述べるように、くだものは当時の贅沢品であった。

『源氏物語』中に「くだもの」は二十六例^⑤現れる。くだものが供される対象を性差別に見た場合、十七例(約六十五%)が男性に対して供されている。残り九場面が女性である。女性の場合はほぼ全てにおいて出されたくだものを拒否しており、食欲のないことが表現されているのに対し、くだものを供された男性は、(食べたかどうか判然としない場合もあるが)全く拒否していない。なお、くだものが供される対象は、源氏八例、薫四例、夕霧と匂宮が各二例、冷泉帝一例である。男性が供された例を見ると、方違えで源氏が紀伊守邸を訪れた際、紀伊守が源氏にくだものをさしあげたり(帚木巻①一七一頁)、新年のあいさつに訪れた薫に対し、藤侍従がくだものや酒をもてなしたりするように(竹河巻⑤六三頁)、客人をもてなすのに用いられる。さらに、

御くだものなどめづらしきさまにて参らせ、人々に酒強ひ
そしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

(明石巻②二三四頁)

御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にも、肴
などめやすきほどにて土器さし出でさせたまひけり。

(権本巻⑤二〇二頁)

とあるように、源氏や薫には「くだもの」、お供の者には「酒」や「肴」を出している。椎本巻で、大君が薫にくだものをさしあげている場面は、宇治の邸の主であつた八の宮が亡くなつてからのことで、大君は客人である薫をこの家の主としてもてなす必要がある。このことから、くだものが上流貴族である客人をもてなすのにふさわしい食べ物であつたといえる。つまり、「くだもの」が供される時、主は相手を客として厚く待遇しようとしているのである。

以上のように、「くだもの」も「強飯」も一概に「うちとけた態度」を示すとは言い切れない。しかも、「はかなきくだもの」、強飯ばかりはきこしめす時もあり」と描かれるように、明石の君が供したとはいえ、「はかなきくだもの、強飯」を選択し食したのは源氏である。明石の君と「うちとく」ために、なぜ客人に供され鄭重さを示す「はかなきくだもの、強飯」を選択したのだろうか。

『源氏物語』において、女君²³から男君に供される食べ物を見ると、七例中五例が宇治十帖においてであるが、ほぼ「くだもの」ばかりである。大君が薫の指示により句宮をもてなす準備をする総角巻の場面について、木谷氏が「くだもの、肴など」は、女主人が親疎とりまぜた男性客人たちをもてなすのにふさわしいメニューなのである」と言及しているように、くだものは女君から男君にさしあげられる食べ物としてふさわしいものであつた。だからこそ、通常は外で食事しない源氏が食べる物として、

明石の君に「はかなき」という控えめなニュアンスを含ませた「くだもの」を供させたのだろう。併記した順序からも、「くだもの」を主としていたことが窺える。

だが、この中で薄雲巻の「強飯」は明らかに異質である。他に「くだもの」と「強飯」が合わせて供されている例として、『うつほ物語』菊の宴巻を挙げることができる。あて宮に心を奪われ妻子をないがしろにしていた実忠が、偶然北の方と再会する場面である。北の方は、実忠が妻子を顧みなくなつていた間に息子の真砂子君を亡くし、悲しみに暮れ、娘の袖君を連れて志賀に隠棲していた。実忠はあて宮の東宮への入内の噂に心落ち着かず、比叡山に籠つていた帰り道であつた。ここで、北の方は松の実やくだものを盛つて、きのこなどを混ぜた尾花色の強飯をさしあげる。

出だしてしばしばありて、透箱四つに平坏据ゑて、紅葉折り敷きて、松の子、菓物盛りて、くさびらなどして、尾花色の強飯など参るほどに、雁鳴きて渡る。北の方、かはらけにかく書きて出だしたまふ。

北の方秋山に紅葉と散れる旅人をさらにもかりと告げて行くかな

源宰相、

実忠旅といへど雁も紅葉も秋山を忘れて過ぐすときはなきかな

北の方、

北の方 あき果てて落つる紅葉と大空にかりてふ音をば聞く
もかひなし

などいへど、気色も見せず。

（菊の宴巻②一〇六頁）

「気色も見せず」とあるように、北の方は自分が実忠の妻であるとは素振りも見せない。木谷氏が述べるように、「くだもの、強飯」は、妻が夫に出す食事らしくない」といえる。

「強飯」ではないが、米から作られたものと「くだもの」が並列して語られる例として、『うつほ物語』には、他に次の二例が見られる。

種松、三月三日の節供なんど、かばかり仕うまつれり。

（中略）乾物、果物、餅など調じたるさま、めづらかなり。

（吹上上巻①三九一頁）

頭の中將、御前どものものなど参らせたまふ。いぬ宮の御前には、白銀の折敷、同じ高坏に据ゑて十二、御器ども、檜破子三十荷、木地の窪の坏ども、餅四折敷、乾物四折敷、菓物四折敷、數物、心葉、いと清らなり。

（蔵開上巻②四一八頁）

吹上上巻では三月三日の節供に客人をもてなしており、蔵開上巻はいぬ宮の五十日の儀である。どちらも、ハレの場である。

『源氏物語』において、儀式中に食べ物が描かれる例は、ほと

んどが人生の転機、年の変わり目に関わる祝い事である。その中で描かれる食べ物は、主食である米類が多数を占める。米類とは屯食、餅、粥、椀飯である。米からできている点では、酒も同様である。

他には、若菜、御くだもの、粉熟がある。若菜については、若菜上巻で源氏四十賀の際源氏にさしあげられたものであり、別途考察の必要がある。粉熟は宿木巻における勾宮と中の君の男君誕生を祝う産養に見られる。『花鳥余情』に「五穀を五色にかたとりて粉にして餅になしてゆて、甘葛をかけてこねあはせてはそき竹のつ、をして其中にかたくをしいれてしはしをきてつき出てその姿双六の調度のことくまなふ也」と注される菓子的一种であった。御くだものは、行幸巻において大原野行幸に欠席した源氏が冷泉帝に御酒とともに献上されている（行幸巻③二八四頁）。描かれたハレの場の食は、「米」と「くだもの（菓子を含む）」が重要な位置を占めていたといえよう。

『源氏物語』中において、米から作られたものと「くだもの」が並列して語られる例は、少女巻に見られる。大臣大饗も終わった頃、内大臣邸での私宴の夜に、皆が「御湯漬くだもの」を食している。

暗うなれば、御殿油まあり、御湯漬くだものなど、誰も誰も聞こしめす。姫君はあなたに渡したてまつりたまひつ。
しひてけ速くもてなしたまひ、御琴の音ばかりをも聞かせた

てまつらじと、今はこよなく隔てきこえたまふを、「いとほしきことありぬべき世なるこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもさめきけり。
(少女卷③三二頁)

夕方頃、夕霧が来訪し、勧められて笛を吹く。内大臣はこれに合せて笏拍子を打ち唄い、暗くなつてきたため、皆「御湯漬くだもの」などを食す。この食事には、主である内大臣の思惑が入り込んでいる。つまり、食事の一文の直後、波線部に見えるように、内大臣は雲居雁を夕霧から遠ざけようとするのである。

『枕草子』「宮仕へ人のもとに來などする男の」の章段において、「宮仕へ人」である女の家で男が食事をすることは疎ましく思われている。しかも、「さらに湯漬をだに食はせじ」(三二六頁)と断固拒絶しようとするほど、女のもとで食事をするのは、女にとつて厭わしいことであつた。『新全集』頭注は「恋人の逢瀬に、食物などが登場するとはもつてのほか、という感覚」と述べている。夕霧を雲居雁の結婚相手とは認めない内大臣だからこそ、恋人に供することが疎まれる湯漬や、客人に供するくだものを出させるのである。

さらに、『落窪物語』には、落窪の君に仕える侍女あこぎが、道頼と落窪の君との三日夜の餅の準備に奔走している様子が描かれている。

夜さらは三日の夜なれば、へいかさまにせむ、今宵餅いか

でまゐるわざもがな」と思ふに、またいふべきかたもなければ、和泉殿へ文書く、

「いとうれしう。聞こえさせたりし物を、賜はせたりしなむ、よろこびきこえさする。またへあやし」とは、思さるべけれど、今宵餅なむ、いとあやしきさまにて、用侍る。取り交すべきくだ物など侍りぬべくは、少し賜はせよ。
(巻之一 五五頁)

あこぎは和泉守邸に文を贈り、餅と取り合わせのためのくだものを頼んでいる。三日夜の餅ではくだものもとにも出されるものだったことがわかる。

先述した『枕草子』のように、恋人関係では食べ物を供するのは憚られる。しかし、正式な結婚においては、食は重要な意味を持つていた。高群逸枝氏は、男が女の許に通い三日目に行われる「ところあらはし」が、「忍び婚で寝ている現場を暴露し、その現場で婿をとらえて、否応なしに婿の口へ妻方の餅をおしいる。そうすることによつて、婿は妻方の家族とされてしまうというみをもつ呪法である」とし、「婿が妻族と同火共食することのみするものである」と述べる。服藤早苗氏は、正式な妻の要件として、「身分が同等であり、さらに「三日設」としての供餅儀を行い、正式な結婚をしたこと」を挙げている。

源氏と明石の君との間には、三日夜の餅は描かれない。初夜以降の描写を見てみよう。

御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。

ここにも、かかる事いかで漏らさじとつつみて、御使ことごとしうもてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんとし思し憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、げに、いかならむと、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御気色を待つことにはす。今さら心に乱るも、いといとはしげなり。(明石巻②二四八頁)

後朝の文さえ内容は示されず、専ら紫の上への良心の呵責が語られる。これ以降の源氏の訪問は「時々」であり、「忍び」の恋であることが強調されている。身をやつして下向していることと紫の上のことが思われるからである。通常であれば歓待されるはずの文使いも「ことごとし」く扱われない。そのような状況で「ところあらはし」ができるはずもない。

源氏と明石の君の前で食事の場面が描かれるのは、薄雲巻のこの場面が初めてである。源氏は、明石での夜、松風巻で大堰邸を訪れた日に続き、琴・琵琶を掻き合せて明石での夜を懐旧した後、ハレの場で供される「くだもの強飯」を自ら食す。それによつて、明石の君に強いてきた「忍び」の関係を「ところあらはし」しようとしているのではないだろうか。

第三章 「うちとけ」ぬ明石の君

第二章までは、源氏の視点を中心に見てきた。源氏は自ら「はかなきくだもの、強飯」を選択し、食したのである。明石の君は、「御心おきてにもて違ふことなく」と描かれるように、源氏の意向に背くことはない。しかし、このような源氏の様子を見て、明石の君は「近きほどにまじらひては、なかなかいと目馴れて人侮られることどもぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ」と、源氏の側近く、つまり二条院に住まうことになった時のことを考え、気を揉んでいる。それは、他の「やむごとなき所」とは異なる源氏の「うちとけ」た態度がそうさせているといえるだろう。では、明石の君にとつて、「うちとけ」た態度とはどのようなものだったのだろうか。

明石の君自身が「うちとけぬ」人物であることは、明石巻から語られている。その「心ざま」は、身をやつした自分を侮っているのかと源氏に「ねたう」さまざま悩ませるほどである。

うちやすらひ何かとのたまふにも、かうまでは見えたてまつらじと深く思ふに、もの嘆かしうて、うちとけぬ心ざまを、「こよなうも人めきたるかな。さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひた

りしを、いとかくやつれたるにあなづらはしきにや」と、ねたうさまさまに思しなやめり。

(明石巻②二四六頁)

源氏と明石の君との初めての逢瀬の場面では、「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとおほえたり。」(明石巻②二四七頁)とあるように、明石の君の「けはひ」は、第一章で源氏が「うちとけ」られない相手であると述べた六条御息所を髣髴とさせている。そして、「うちとけ」(同)ていた明石の君の許に源氏が突然押し入ったことにより、近くの部屋に入って固く閉じ籠る。源氏に対して「うちとけ」ていた姿を隠すのである。

野分巻でも、源氏の訪れを察すると「うちとけ」(野分巻③二六九頁)ていた姿を、小桂を羽織つて押し込めてしまう。若菜上巻では、実の娘である明石女御に対しても、「常にうちとけぬさま」(若菜上巻④一一六頁)の対応をしている。明石の君は誰に対しても「うちとけ」ることをよしとしないのである。

若菜下巻で、源氏は紫の上を前に女性を論評する際、明石の君がうわべは人の言いなりになつていて、穏やかに見えながら、「うちとけぬ気色」(若菜下巻④二〇一頁)を内心に込めていることを指摘している。紫の上も「うちとけにく」(二〇二頁)い人であることに納得している。「うちとく」ことで親愛を表現する源氏と、その源氏と「うちとけ並」(玉鬘巻③一一三頁表1-10)んでいた紫の上にとつて、明石の君は相容れない価値観を持つ人物だった。

一方の源氏は、そのような「うちとけ」ぬ明石の君に対して「うちとけ」て見せる。明石巻の、まだ源氏が明石の君に対して慰み程度に逢いたいくらいにしか思っていなかった頃、明石の君を何とか人目に立たずに自分の居所に來させるよう明石入道に要請する。それに対し、明石の君本人は、人の数にも思われぬ自分などが、一時都から下つてきているだけの人の「うちとけ言」(明石巻②二四三頁)につられて、軽率に逢うのは物思ひの種を作るだけであるという。つまり、源氏の言葉は「うちとけ言」であり、明石の君はそれを聞き入れることを憂慮する。ただ、源氏が明石にいる間だけ文のやり取りをすることだけで幸せに思おうとしている。

結果的に明石の君はその「うちとけ言」に乗る。その後、娘を為し、上京し、大堰邸に住む。表1-8松風巻では、源氏が明石の君の前で、須磨・明石での往時を回想し、「泣きみ笑ひみうちとけ」(松風巻②四〇一頁)話をしている。この場面は、明石の君が上京し、大堰邸に入つてすぐのこと、源氏は大堰邸の造園などを指示している。明石の君も源氏のこの様子については、「いとめでたし」(同)と感じている。主然としてふるまい、自分たちのこれから住む大堰の修繕に力を入れる源氏の「うちとけ」た姿は、すばらしく感じられる。

しかし、上京した明石の君には、様々な状況が見えてくる。「人の御ありさまも、こころの御中にすぐれたまへるにこそは」(薄雲巻②四一八頁)と書かれるように、紫の上には敵わないの

だと思ひ知る。「やむごとなき所」では、大堰でのような「うちとけ」たふるまいはしないことを聞く。明石の君は、常に他と比較し、自身の「身のほど」を意識してきた。「やむごとなき所」とは異なる自身の「身のほど」が、源氏を「うちとけ」させ食事させることを認識する。

源氏がたまにわざわざ足を運んでくれるという状況に対し、明石の君は「たけき心地すれ」と思う。藤原克己氏が「彼女の心高さが、光源氏や六条院の秩序によって、あるいは彼女自身の身のほど意識じたいによって、きびしく抑圧されながらもそれに抵抗し、あるいは忍従しつつ、かろうじてわが身を「たけ(高)く」思うというのが、明石の君の人物造型に一貫する基本型である。」と指摘するように、自身の本音を押し込め、身のほどにあつた妥協できる気持ちを表出し自分を納得させた結果が、明石の君にとつての「たけし」である。明石の君の本心は別のところにある。

この直前には、明石の君の危惧が「いとど、目馴れ」と述べられているように、源氏は既に明石の君に「目馴れ」ているから食事をするのである。が、人目につく二条院に移つて、これ以上「目馴れ」られ、それが人に侮られるようなことがあればと不安がある。確かに源氏は、今は客人にもてなすような、しかもハレの食である「くだもの、強飯」を選んで食べている。しかし、このような源氏の「うちとけ」た態度の延長線上に、常に「身のほど」を意識し、「うちとけ」ることのない明石の君の危惧があるのである。

おわりに

源氏の「うちとけ」る態度は、ひと気のない場所、親兄弟などを中心とした信頼に値する人物に対しての親愛表現として向けられる。他方、自分より身分の高い貴族などには畏れ多く思い「うちとく」ことができない。それゆえ、都から離れ、身分が低いながらも信頼に足る明石の君のいる大堰は、源氏にとつて「うちとく」ことのできる場所であつた。源氏は「うちとく」ことのできる場所を求めて大堰を訪れ、食事をする。とはいへ、通常「聊爾」と思われる場所での食事であり、品位を欠くようなものは食さない。明石の君を尊重する意味もあつただろう。源氏は、「ねびまさりゆく」明石の君との仲をつなぎ止めるために、明石の夜を思い出す琴を掻き合わせ、「はかなきくだもの、強飯」を食するのである。

一方の明石の君は、源氏の前で出過ぎたことはせず、卑下しすぎることもない。そして、源氏の意向のままに、「はかなきくだもの、強飯」を供する。しかし逆に考えると、「はかなきくだもの強飯」を供することは、源氏の意向に背かない明石の君の姿を描かせる行為であつた。明石の君にとっては、「やむごとなき所」では為されない「うちとく」こと、つまり食事自体が品位を欠くものであつたといえよう。それでも明石の君は自身の心を打ち明けることはない。若菜下巻で源氏が論評するように、明石の

君は「うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色」(若菜下巻④二〇一頁)を内に秘めている。阿部秋生氏は、上京してから明石姫君との別れを覚悟するに至る明石の君の心境について、次のように述べる。

それまでの「身のほど」ばかりを気にしてゐる源氏の忍び妻の一人にすぎなかつた明石の君は、「身のほど」はどう足掻いてみてもどうにも変へることのできないことを知つたのであらう、そこに拘泥してゐるよりは、受領の娘といふ「身のほど」の自分が、どれほどやむごとなき御方々に劣らずに動けるものかをやつてみようと思つたかのやうに、冷静な、しかも張りつめたやうな生活を始めるやうになる。

本心まで「うちとけ」ることのない明石の君の態度は、常に「身のほど」意識に苛まれてきた明石の君が、「やむごとなき」人々の中で「たけき心地」を保ち暮らすための処世術であつたのだろう。宮武氏が述べるように、「うちとけ」た関係にはかなり段階性がある。明石の君の心中には、人目につく場所で「うちとく」源氏の態度がエスカレートし、「い、とど、目馴れ人侮られなること」を恐れている。大堰邸での食事は、「うちとく」源氏と「うちとけ」ぬ明石の君の間に潜んでいる、気持ちのズレを映し出すものではないだろうか。

注

- (1) 本稿における引用本文は、別途注しない限り次の通りである。『源氏物語』は『日本古典文学全集』(小学館)、『枕草子』は『和漢朗詠集』、『うつほ物語』、『落窪物語』は『新編日本古典文学全集』(小学館)。なお、傍線、傍点、和歌の詠者名等については筆者が適宜付した。
- (2) 末沢明子「大堰山荘の強飯」(福岡女学院大学紀要人文学部編) 一八 二〇〇八年二月
- (3) 動詞一六〇例(「うちとけある」「うちとけゆく」などの複合動詞を含む)、「うちとく+名詞」八例(「うちとけわざ」「うちとけごと」など)、「うちとく+形容詞」二例(「うちとけがたし」「うちとけにくし」)を合わせる。
- (4) 宮武利江「うちとくる」女性の非貴族性―『源氏物語』の用例から―(文教大学文学部『文学部紀要』二二 二二〇〇九年三月)
- (5) 「昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふ」(松風卷②四〇二頁)とある。
- (6) 「弄花抄 付源氏物語聞書」(源氏物語古注集成第八巻) 桜楓社 一九八三年四月
- (7) 「内閣文庫本 細流抄」(源氏物語古注集成第七巻) 桜楓社 一九八〇年十一月
- (8) 「邦訳日葡辞書」岩波書店 一九八〇年五月
- (9) 『日本古典文学大系』(岩波書店)を引用する。なお、

この本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）には見られない。

- (10) 伊藤博「食事」（『平安時代の信仰と生活』至文堂 一九九二年一月）

- (11) 『厨事類記』（群書類従第十九輯）続群書類従完成会 一九三二年十月

- (12) 『小右記』寛弘五（一〇〇八）年九月十日条において、辰の刻、中宮彰子が産気づいたとの知らせを受けて集まった公卿・殿上人らに対し藤原道長が「強飯・粥」をふるまっている。

- (13) 木谷眞理子「源氏物語と食」（『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月）

- (14) 「菓菰」唐韻云説文木上曰果字或作菓日本紀私記云古乃美俗云刈刈乃地上曰菰力果反和名刈漢書注張晏曰有核曰菓無核曰菰核見應劭曰木實曰菓具草實曰菰（京都大学文学部国語国文学研究室『諸本集成倭名類聚抄（本文篇）』臨川書店 一九六八年七月（元

- 和古活字那波道圓本）
- (15) 小島幸枝「菓子」（『講座日本語の語彙』第九卷 明治書院 一九八三年一月）

- (16) 藤本宗利氏（『源氏物語の「食ふ」——横笛巻を中心に——』『源氏研究』二一九九七年四月）、木谷眞理子氏（前掲）などの論考がある。

- (17) 『和漢朗詠集古注釈集成』第三巻 大学堂書店 一九八

九年一月

- (18) 小林章『果物と日本人』日本放送出版協会 一九八六年八月

- (19) 東屋巻に、弁の尼が薫にくだものをさしあげている場面では「くだもの」の語自体は二例見られるが、今回は同一場面であるため一例として数えた。以下同じ。

- (20) 薄雲巻において、明石姫君が二条院に迎えられ、到着直後に、「こなたにて御くだもの参りなどしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬを求めて、らうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて慰め紛らはしきこえたまふ。」（薄雲巻②四二五頁）とくだものが出されている。これについて、『大系』『評釈』『全集』などは「お菓子を召し上がる」と訳すが、宮腰賢氏（『源氏物語・薄雲』）「御くだものまゐりなどし給へど」の解釈——尊敬語「まゐる」考——（『学芸国語国文学』九 一九七四年一月）は、「まゐる」の用例について分析し、この場面は「紫の上の室でおめざのお菓子を整えたりなさるけれど、ようよう目覚めて周囲を見まわし、生母明石の上を目で探して、いかにも可愛らしくべそをおかきになる」（傍点ママ）と述べ、明石姫君が実際に「御くだもの」を食したわけではないことを指摘している。その説に従えば、くだものが女性に供された全体的場合において、女性はいくだものを食べていないことになる。なお、「（御）くだもの」のみで考え

ると、拒否するのは女性だけであるが、柏木は「はかなき柑子」を拒否している。これについては稿を改めたい。

- (21) 女房が主体となつて動いているものに関しては含めない。

- (22) 「御」くだもの」以外には、「強飯」(薄雲巻)、「橘」(胡蝶巻)、「肴」(総角巻)、「蓮の実」(手習巻)がある。「蓮の実」以外は「御」くだもの」と併記、またはくだものの一つとして記され、「蓮の実」も果実と考えられる。

- (23) 拙稿『源氏物語』の茶——胡蝶巻の中宮御読経をめぐって——(『日本文芸学』四六 二〇一〇年三月)

- (24) 『源氏物語』中に「粉熟」は二例見られる。もう一例は宿木巻の藤の宴においてである。ハレの場ではあるが儀式ではないので今回は挙げなかった。

- (25) 『河海抄・花鳥余情』(源氏物語古註釈大成第六巻) 日本図書センター 一九七八年十月

- (26) 高群逸枝『招婿婚の研究二』(高群逸枝全集第二巻) 理論社 一九六六年五月

- (27) 服藤早苗『落窪物語』にみる婚姻儀礼——平安中期貴族層の結婚式』(『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』六 二〇〇六年十二月)

- (28) 「いとめでたし」は地の文であるが、玉上琢彌氏(『源氏物語評釈』第四巻 角川書店 一九六五年九月)が「いとめでたし」と明石の御方がそして作者、また読者

が、見るのである」と解説しているのに従う。

- (29) 藤原克己氏(「たけき心地——明石の君の人物造型——」『人物造型からみた『源氏物語』至文堂 一九九八年五月)は、この薄雲巻での「たけき心地」についても、「愛情の満足感とは遠い」と述べる。

- (30) 阿部秋生『源氏物語研究序説下』東京大学出版会 一九五九年四月

(おぎた・みどり 本学博士後期課程)